アウクスブルク滞在記

吉岡　奈穂

はじめに

私は 8 月 29 日から約 10 日間、尼崎市青年使節団の一員として尼崎市の姉妹都市であるドイツ・アウクスブルク市へ訪問しました。

出発の日、たくさんの荷物と期待、そして少しの不安を詰め込んだ大きなスーツケースを持って家を出たことを覚えています。現地ではホームステイをはじめ、さまざまな体験を通して多くのことを学び、かけがえのない思い出をつくることができました。

そこで本滞在記では、約 10 日間の思い出の一部を記したいと思います。

1 日目

関西国際空港からシンガポールを経由し、長いフライトを経てミュンヘン空港に到着しました。出発前は、シンガポールでの約 7 時間の乗り継ぎ時間をどう過ごすのか少し心配していましたが、団員のみんなと空港を散策したり、買い物しているとあっという間に時間は過ぎ、みんなと打ち解けた状態でアウクスブルクへの旅をスタートさせることができました。

到着して驚いたことは、気候の涼しさと街並みの綺麗さです。空港からの移動中、バスの 2 階席の窓から街を眺めているだけで非日常を感じました。

そして、初めてホストファミリーと顔を合わせた時は、温かい笑顔とハグで迎えてくれました。最初は緊張して英語も全然喋れず、ニコニコするしかできませんでした笑。

2 日目

この日、印象に残っているのは、アウクスブルク市庁舎への訪問です。アウクスブルクの旧市街の中心部に位置しています。市庁舎前広場（に面しており、堂々とした姿でそびえ立っていました。

次にグランドホテル・コスモポリスという難民の住居と誰もが集まれるカフェなどが合わさった複合施設を見学しました。そこは資本金無し、家具等は寄付、塗装や修理等もすべてボランティアで作られており、お互いの利益になるような交換システムが掲げられていました。このような施設がつくられた理由として「ドイツの地でどんな人でも快適に過ごしてほしい」という想いが社会全体に根付いていること、そしてその背景には戦争の歴史や反省があることを教えてもらいました。ドイツの人の自分と異なる人を受け入れる寛容さは、アウクスブルクで生活する中でも肌で強く感じました。

夜ごはんのあと、初日は移動の疲れで忘れてしまっていた日本からのお土産を渡しました。想像以上に喜んでくれて、お土産を部屋のあちこちに飾ってくれました。お互いの文化を紹介しあう楽しい夜を過ごすことができました。

3 日目

この日は表敬訪問がありました。ロココ・ホールというシャンデリアのある綺麗な部屋で、教育長や在ミュンヘン日本総領事のお話を聞いたり署名を行ったりしました。自分が尼崎の代表として来たのだとい

うことを一番実感した瞬間でした。
次に、市場の見学に行きました。試食でいただいたパンにパプリカクリームがのったものがとてもおいしくて、思わず購入しました。市場といってもとても綺麗で、地元の食べ物からカフェ、お花屋さんなどがあり、どこか日本の商店街のようにも感じました。

昼食の後は、伝統衣装の試着体験をしました。かわいい伝統衣装を着ることができて、写真を撮る手が止まりませんでした。時代によって伝統衣装がどのように変わっていったのかも学ぶことができ、とても充実した一日でした。

4 日目

今回のプログラムで一番楽しみにしていた「ノイシュヴァンシュタイン城」を訪れました。晴天に恵まれ、写真で見ていた憧れの絶景そのものを間近で見ることができました。ノイシュヴァンシュタイン城はシンデレラ城のモデルのとしても有名ですが、１９世紀にバイエルン王ルートヴィヒ２世が、要塞としてではなく自分の好きを詰め込んで作ったお城だそうです。そのため、お城の中は一つの建築様式で統一されているわけではなく、部屋ごとにまったく違う雰囲気の部屋が広がっていました。特に驚いたのは、お城の中に鍾乳洞のような部屋があったことです。きらびやかな部屋の隣に、岩でできたようなごつごつした部屋が広がっていて、次はどんなお部屋だろうとワクワクする魅力的なお城でした。

5 日目

最も印象に残っていることは、ダッハウ強制収容所の見学です。ナチス政権下のドイツで何が行われていたのか、ガイドの方の解説を聞きながら見て回りました。施設内には目をそむけたくなるような悲惨な写真も残され展示されていて、多くの人が恐怖に支配され、厳しい労働を強いられていたことを学びました。改めて、戦争には一つもいいことがなく、たくさんの人が深く傷つけられることを感じ、二度と起こしてはいけないと強く思いました。

6 日目

午前中は職業訓練センターを見学しました。アウクスブルクに到着してから目まぐるしく色々な施設をまわってきましたが、これが最後だと思うと寂しい気持ちがありました。日本ではスキルを身につけるために学校にお金を払って学ぶのが一般的ですが、ドイツでは企業や訓練施設で、実際に仕事を体験し、働きながら給料や手当をもらい、仕事に必要なスキルを身に着ける仕組みに驚きました。さまざまな仕事について深く学べる機会があるため、自分のやりたいことを見つけられる可能性が広がりそうだと思いました。

午後は送別会が行われました。日本での事前研修から準備してきた出し物を、無事披露することができ安心しました。発表中はホストファミリーたちが楽しんでいる姿が見えて嬉しかったです。また、たくさんの人を前にして英語で発表するという貴重な経験ができました。

7 日目

午前中は、ホストファミリーが買い物に連れて行ってくれました。地元のとても大

きなスーパーで、きゅうりだけで陳列台の1レーンが埋まるほどの品ぞろえに驚きました。お菓子やスープなど、欲しかったものをたくさん選ばせてもらい、気がつけば驚くほどたくさんの食料品を買ってもらっていました。また市内の本屋さんを巡ったり、抹茶専門？のカフェでゆっくり過ごしたりと、本当の家族の一員になれたような穏やかな時間を楽しみました。

午後からは、プレラー（Plärrer）というアウクスブルクの移動式遊園地へ行きました。日本では見たことのないような絶叫アトラクションに挑戦したり、ビールテントで生演奏のバンドを聴きながらドイツビールを楽しんだりしました。きっと、一緒にアウクスブルクに行くことになった大好きな団員たち、ホストファミリーと一緒に飲んだビールの味、光景はこれからも忘れることのない思い出になると思いました。

最後に

今回の10日間の滞在を振り返ると、たくさんの人に支えてもらい、アウクスブルクが大好きになった旅だったと感じます。さまざまな施設を訪れドイツの生活や教育、働き方など日本とは異なる文化に触れることで、自分の視野を広げることができました。一方で、ホームステイ先では言語や文化の違いがありながらも、相手に寄り添う気持ちや人を思いやる気持ちはそれを超えて伝わるということ。遠く離れた国で暮らす人であっても、同じ気持ちになり繋がれるということを実感しました。

この10日間の経験は、私の人生の宝物です。学生生活最後の夏にこのプロジェクトに参加できたことを、心から幸せに思います。

いつも明るく旅を盛り上げてくださった通訳の方、常に私たちが困っていないか、楽しめているか気遣ってくれた尼崎市の職員のみなさん、心優しく助け合いながら一緒に楽しんでくれた団員のみんな、大きな愛と優しさをくれたホストファミリー。関わってくださったすべての皆さんに、心から感謝申し上げます。





